

「生きる力」をはぐくむ 学校の福祉教育

子どもの「生きる力」をはぐくむ、学校での福祉教育が注目を集めています。背景には、虐待やいじめ、格差社会など、子どもを取り巻く環境に、大人社会の問題が押し寄せてきている現状があります。このような環境の中で自分らしく生きていくために、子ども自身が自分を守り、「生きる力」を身につける必要に迫られているといえます。「生きる力」を身につける学習の過程で、「自分を大切にすることの重要性に気づく」ことができれば、他の課題を抱えた人を理解し、思いやる心も、自ずと生まれてくるのではないのでしょうか。今回は、大阪府立西成高等学校の取り組みを中心に、福祉教育のあり方について考えてみたいと思います。

社会で生きる力を身につける

学校では「総合的な学習の時間(以下、総合学習)」を利用して、さまざまな福祉教育が実施されています。例えば、点字や手話の学習、アイマスクや車いすなどの疑似体験は、子どもたちが障害を理解する方法として多くの学校で採用されています。また、地域で課題を抱える当事者から話を聞いたり、ボランティア活動などを通じて、「共に生きること」の重要性を学んだりすることも多くなりました。

昨今、虐待、いじめなどが後を絶たず、また、格差社会の現実が、将来を担う子どもたちの前に突きつけられています。子ども自身の人権侵害が問題となるなか、自分を守り、「社会で生きる力」を身につけることが福祉教育に期待されています。自らの人権を考えることは、他者の人権に配慮し、社会的に排除された人との共生を学ぶことにつながります。

生徒たちの抱える課題から出発

大阪府立西成高等学校では、2006年「格差の連鎖を断つ」を学校のミッションに掲げました。格差の連鎖とは、親の不安定な就労状況のもと、経済的に厳しい環境に育った子どもたちが、成長後も経済的自立を果たすことができず、結果的に貧しさを引き継いでしまうことをいいます。

そのような中で、総合学習で「子どもの心の奥に迫る授業ができないか」「自分たちの暮らす西成のことについて勉強できないか」と検



大阪府立西成高等学校
校長◎山田 勝治さん

討され、2007年度から1年生の総合学習「CHALLENGE」の内容を「反貧困」を軸に再構成していきました。

教材を超えた力をもつ感想文

講座のテーマは多岐にわたります。一人親が年々増えている現状を踏まえて「シングルマザー」を取りあげるほか、ワーキングプアやネットカフェ難民、子どもの虐待など、報道番組などを利用しながら、厳しい現実を可能な限りありのままに紹介。生徒が自分たちの置かれている社会の状況を「意識化」できるようにするのがねらいです。

校長の山田勝治さんは「教員が教えるというより、生徒が気づいたことをどう共有していくかが大きなポイント。こんな問題があります、というだけなら、社会科の勉強と同じ。生活課題を含めて、切実な問題を出していきました」

すると、授業の最後を書く感想文に、子どもたちがこれまで語らなかった自身の問題について書き始めたのです。これを読んだ教師は「こんな生活をし、こんなことを思っていたんだな」と、生徒について、いろんなことを考えるようになっていきました。翌週の授業では、感想文を元に、教師が他の生徒へと伝えます。そうすると今度は「自分だけじゃない、他にも生活のしづらさを抱える子がいるんや」と子どもが気づくようになります。

「教師は、教材をつくってはいますが、むしろ、課題を抱えた当事者である生徒たちの、生活のにじんだ感想こそが本物で、教材を越えた力を持ちます」と、当時1年生の総合学習の担当で、学校全体の人権教育の担当であった肥下彰男さんは話します。

社会という構造のなかにいる自分

生徒が抱える生活課題について取り上げる際、授業を通じて課題を抱える生徒本人へも伝えなければならぬため、指導に当たっては、十分な知識と理解が必要でした。授業前日の夜は、遅くまで学校に残り準備する教師もいました。同じテーマであっても、約70人いる教師が試行錯誤を重ね、それぞれのやり方で伝えていくのです。

肥下さんは「なかでも就職氷河期を経験した30代の教師は、友人の多くが正規社員になれなかったことなど、自分の問題として語ってくれ、生徒に伝わりやすかった」と話します。

取り組みをすすめるうちに、生徒一人ひとりの生活のなかに見られる貧困が、社会的な排除の構造のなかで生み出されたことに、教師も生徒も気づいていきました。日本の貧困問題は昔からあり、西成にも多くの問題が集積されていました。そこには、部落差別、民族差別、寄せ場差別の結果としての貧困がありました。ワーキングプアやネットカフェ難民、日雇い派遣などの近年の社会問題は、西成が抱えてきた問題が全国化した姿だったのです。

肥下さんは、「反貧困」の意味についてこう話します。

「反貧困学習とは、貧困をなくす社会をどう



総合学習・人権教育
担当教諭◎肥下 彰男さん

つくるかの学習であり、すべての学校に必要なものだと考えています。これまで貧困は、個人や家庭の問題であって、社会的な問題ではありませんでした。唯一、貧困を社会的な側面でもらえていたのが、差別との関係です。しかし、「差別」に焦点が当たり、「貧困」そのものが主題となることはなかったのです」

自分が解決する主体になる

学習の効果は、少しずつ生徒たちに現れました。「社会の中の矛盾」に気づき、自ら行動を起こし始めたのです。

アルバイト先を納得のいかない理由で解雇された生徒が、自ら労働基準監督署に通報して解雇予告手当を勝ち取ったり、非正規ユニオンに加入し、バイト先に団体交渉を申し入れ、和解金を得たりするなどの行動がみられるようになりました。



「『お金が欲しかったんじゃない。納得できなかったことを自分で行動して変えたかった』と彼らはいいます。

教育の現場では「自己肯定感を大切にしよう」「人への思いやりをもって」といわれますが、実際に目の前に起こっていることを解決できなければ、自己肯定感も育たないし、人に対する思いやりも育たないのではないのでしょうか。彼らは、自分から動けば、周りも変えていけることを他の子にも伝えたいといっています」と肥下さん。

それぞれの明日へ

進路を決めた3年生は、反貧困学習「CHALLENGE」にどんな感想を持ったのでしょうか？

小学生のとき会社が倒産し、その後は派遣

で働いた製造業から雇止めにあい無職となった親を持つ生徒は、親がなぜ再就職できないのか、ずっと疑問を持っていましたが、生活がしんどいのは、親のせいではないと気づけたそうです。

「しんどいのは自分だけではないとわかった」という生徒もいます。夢を叶えるため、アルバイトをして貯金を貯めましたが、資金不足で進学をあきらめざるを得ませんでした。それでも、身近な夢をひとつずつ実現するために、前に進んでいきます。

また、ある生徒は「西成に生まれ育ってよかった。これまで西成を悪くいわれても反論できなかったけど、ここに暮らすおっちゃんたちが日本社会を支えてきたこと、高齢化して働けなくなって野宿せざるをえない状況になっている現状を説明できるようになった。そんなおっちゃん

たちとともに、生きている自分が嬉しい」と話したそうです。

自分が生きるということと真剣に向き合い、自分なりの答えを見つける生徒が出てきているのです。

最後の一步は自分で踏み出せ!

子どもは、もともとその子本来の力を持っています。しかし、経済的な理由から生じる、さまざまな問題を抱えた子は、しんどい状況が恒常化すると「自分が何をやってもだめなんじゃないか」と自信をなくしています。しかも、社会的な偏見のなかで生きている保護者を幼い頃からみているため、努力をしても、そこから抜け出せると思えないのです。抜け出せるきっかけをつけたのが「CHALLENGE」です。

「取り組みを通じて、自分は孤立しているのではない。つながろうと思えばつながれる。しんどい状況は自分や親の責任ではないというメッセージは絶えず発してきました。しかし、『最後の一步は、自分で踏み出せ』といたいですね。そのため最大限の準備するのが学校の使命」と山田校長は話します。



講演会の紹介

第2回 社会福祉講演会テーマ

格差に挑む高校～西成高校が大切にすること～

- 日時:平成22年9月2日(木)午後2時～4時
- 場所:大阪市社会福祉研修・情報センター 大会議室(5階)

高校への進学率が90%を超え、「96%」時代に突入した今日、様々な困難な課題のある生徒が入学している。そんな状況の中、西成高校では次の3点を学校ミッションとしている。

- ①西成高校は格差に挑み、それを克服する高校でなければならない。
- ②生徒の誇り、地域の誇りとなる学校になろう。
- ③生徒の希望にカタチを与える学校になろう。

このミッションのもと、生徒の希望と誇りを育む取り組みを行っていることについてお話いただきます。



本の紹介



『反貧困学習～格差の連鎖を断つために』
大阪府立西成高等学校著

発行:解放出版社 定価:1,800円+税

急速に拡大する貧困問題をどう教え、学ぶか。生徒の厳しい生活背景と向き合うなかで生まれた豊富なオリジナル教材を使って「反貧困」を軸にした人権総合学習の取り組みを紹介。

自分たちでつくった学習教材を 授業でモデル的に活用

教材をつくってみませんか？

大阪市社会福祉協議会では、2009年、地域福祉の担い手となる小中学生に対し、福祉のこころを伝え、福祉への関心を促すために、『地域福祉学習教材(リーフレット等)』の企画・作成を一般公募しました。

結果、14団体(個人を含む)から20企画の応募があり、昨年10月に大阪市社会福祉研修・情報センターにてプレゼンテーションを開催。選考委員会で6団体の作品が選ばれました。

採用された作品は、平成22年度より、大阪市内の小中学校において地域福祉学習教材としてモデル的に活用されています。

●選考作品

DVD 探検!私たちの町のバリアフリーをさがそう!! 障害者スポーツを体験してみよう!! ～スポーツを通じて障害を理解しよう～

(大阪市立淀商業高等学校福祉ボランティア科)

障害の有無にかかわらず、一緒に楽しめる身近なスポーツを通じて、障害のある方が地域の一員として楽しく生活できる地域を創造していく事が大切と伝えたい。

リーフレット つながりのある福祉教育の提案 「ともにいきる」ために考える力を養う ～車いすとバスケットボール～

(福祉教育勉強会)

誰もが楽しめるバスケットボールのルールをめぐり、ちょっとした工夫で誰もが安心して活動でき、そして楽しめることができることに気づかせたい。さらに、自分が住む地域社会にあてはめ、自分にできることを考え、実践しようという態度を育てたい。



実践!

「みんなが楽しめるように」だけを条件に、各チームでゲーム開始。終了後、車いすで参加した子どもたちは「パスが回ってこないから楽しくない」「思うように動けずついていけない」。どうすれば楽しいか。車いすの子へ優先的にパスをしたり、シュートの点数を上げたり、車いすの子以外は走らないなどとルールを改正し、再度ゲームの開始。今度は「車いすの子は楽しいが、他の子は、楽しくない」。ではどんなルールなら?子どもたちは、話し合い、作っていくことの大切さ、難しさに気づいていきます。

冊子 福祉教育マニュアル 「子ども・保護者・先生で考える“ふくしのはなし”」及び 平成22年度福祉教育課題別提供プログラム

(大阪市西淀川区社会福祉協議会)

共に考え、学ぶことの大切さと、その課題に実際に出会った時に自分なりの表現方法を見つけ出せるように。互いの“違い”“同じところ”を理解し合い、命のつながり、命の営みの大切さをつたえる。

大阪市西淀川区社会福祉協議会のリーフレット▶
「子ども・保護者・先生で考える“ふくしのはなし”」



「認知症って何だろう?」 子供向け認知症の説明のリーフレット

(大阪市天王寺区社会福祉協議会)

認知症は身近な問題だが偏見が根強い。「共生」について学ぶ第一歩として、認知症について学び、自分たちにもできることがあることに気づいて欲しい。

DVD版「認知症ってなあに?」 ～僕たち私たちにできること」、DVD導入リーフレット

(大阪市東住吉区社会福祉協議会・東住吉区地域包括支援センター)

一人ひとりがちょっとした思いやりを持つことで、認知症の人だけでなく、皆が暮らしやすいまちが作れる。明日からでもできる、「思いやりの心」を育てて欲しい。

DVD 私も地域の住民です! ～当事者が語る福祉のまち～

(住吉区アクションプラン推進委員会 高齢・障がい者部会)

障害者や要介護の高齢者がどのような思いで地域の生活をしているか、生の声を通じて、地域には多くの課題があるいろんな人たちがいることを知り、関わりを持つ契機にしたい。